

目的 生活の多様化に伴って、台所の設備器具も、種類や数が増え、これらが、台所の狭さを困らせている大きな原因の一つとなっている。快適な台所環境をつくる要因を探るために、調査研究を行っているが、本研究は、その一環として、収納スペースと、そこに収まる「もの」との関係をつかむために、各世代における主婦の、料理作りに対する意識と設備や器具の種類と所有数との関係を調べる。

方法 対象家庭を戸別に訪問し、調査票を配布、後日、回収する留め置き法によった。調査対象は、奈良市旧市街地及び近郊の新興住宅地の一戸建て住宅、約300軒である。調査項目は、台所用品の所有状況を中心に、物理的事項として、台所の広さ、建築年数、形式とレイアウト、収納スペースなど。心理的事項として、主婦の料理作りに対する意識、台所の使いやすさ、食器、調理器具、食品の個々の収納スペースに対する満足度などである。

結果 台所用品の所有品目数は、主婦の年齢が40歳位までは、年齢が高くなるにつれて増加するが、その後、殆んど変化がみられない。この事から、40歳位までは、台所の設備器具は、備えられると考えられる。台所の収納スペースは、平均2.5~3(m²)であり、他の調査(森茂子-昭和50年度学術論)と同様の結果となっている。収納スペースに対する満足度は、野菜、鍋などの調理器具、調理用電気器具については低く、かん詰め、乾物、調理小物については、比較的高い。主婦の約70%は、料理作りが好きと答え、加工食品は、約70%の家庭が、たまには使っている。なお、世代別に、設備器具の種類や数などから、収納スペースの割り出しと、望ましい収納のあり方についても検討していく。